

訳 者 解 説

1. この小冊子は、ロブ・スチーブン氏 (Rob Steven) が1976年5月に、ニュージーランド政治学会に提出した 'Monopoly Capitalism and the Class Structure in Modern Japan' の翻訳である。ロブ・スチーブン氏は、ニュージーランドのカンタベリー大学、政治学部で教えており、*Bulletin of Concerned Asian Scholars* の編集委員の1人である。この間、現代日本の階級分析にとりくまれており、本冊子で紹介した論文ののち、'The Japanese Bourgeoisie,' *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol. 11, No. 2 / Apr-June, 1979, 'The Japanese Working Class' *ibid*, Vol. 12, No. 3 / July-Sept., 1980 を著わしたのち、*Bulletin* 掲載の2論文をふくんだ形での単行本 *Classes in Contemporary Japan* Cambridge University を今年の4月に出版されることになっている。この間、この研究のために日本に滞在されている。

翻訳紹介した論文は、日本の階級構造・構成を正面からとりあげたものであること、外国人としてはじめてであること、これまでの日本の階級構成分析の代表作の一つである故大橋隆憲氏編著の『日本の階級構成』を吸収しながら批判の対象としていること、ユニークな階級・階層規定をもって臨まれていること、など注目すべきものであった。そして批判の対象とされた大橋隆憲氏自身が、本論文の概略をすでに、「現代階級論の一つの潮流について—Rob Steven氏の批判によせて—」『経済論集』（関西大学）第26巻第4・5合併号、1977年1月、と「階級構成の分析目的」（坂寄・塩田編『労働問題の今日の課題』所収）有斐閣 1979年8月、とにおいて紹介されている。（大橋氏はこの他、立命館大学人文科学研究所『戦後日本の社会構造の変化』（1980年6月）に、ロブ・スチーブン方式に基く計算表を提出しておられる）。とはいえ、第一に、原論文が入手しがたいため、これをフルテキストで見ることはできないこと、また、その分析が日本の研究者に広く知られてはいないこと、第二に、氏の日本の階級分析は、日本でもさらに論じられることになると思われるが、この論文がとくに氏の分析の出発点に位置しており、また一論文において、日本の階級が全体としてとりあげられている点で、有力な素材になると考えられることから、翻訳紹介することにしたのである。この間、この論文の翻訳の照会にたいして、ロブ・スチーブン氏は、先にふれた二つの論文を同封されたうえで、「4月出版の書物の方が、この重要問題についての自分の最近の考えをよりよく反映しているので、この書物の翻訳を望むけれども、他の論文を訳した方がよいと考えられるなら、それでも結構である」旨の便りを訳者宛に寄せられている。この経過にもかかわらず第一論文をとりあ

げて紹介するのは、上に示した理由による。

2. 大橋氏の先の二つの論文においてのこの論文への言及についてみれば、「一つの潮流」の方で、かなり丁寧な内容の紹介があり、いづれも、たち入った内容の論評はない。わずかながら評価が語られている点をみれば、次の諸点である。第一に、これまで大橋方式と呼ばれてきた国勢調査結果における「職業－地位」表の組替えに基く階級構成表（後掲）に関して、これは「資本主義一般の階級構成の表示でありえても、独占段階の特質を示すものではない」とするロブ・スチーブン氏に対して、「批判は至当であり」、「欠陥は充分承知している」とし、「規模別表示の前段として意義を認めるだけ」とされている。そして、独占段階の階級関係を示すうえでの統計技術的指標として企業規模を手がかりにする点についても、大橋氏は「同意見」と述べられている。〔念のために注記すれば、大橋方式が定式化された論文は「社会階級構成表の意義と限界 — 統計にあらわれる資本家階級について —」（『経済論叢』1959年5月）と題されており、独占資本家の区別がない点で問題が残っているとしていた。そして大橋氏には、独占資本家層を追求された「日本の独占資本家層の実態」（『経済評論』1963年7月）、「独占資本家層再編の一紐帯」（『経済論叢』1964年11月）、「戦後日本の階級構成と最高経営者中核部」（蜷川虎三古稀記念論文集『現代の経済と統計』1968年）等がある。スチーブン氏の批判の対象となっている『日本の階級構成』には、独占資本家層の摘出と、企業規模と経営形態に着目しての労働者階級の上、中、下層への分類がある〕。第二に、ロブ・スチーブン氏が、就業人口を、(A)ブルジョアジー、(B)中間階級、(C)ルンペン・プロレタリアートと三大区分する点に関して、「この区分に関するかぎり、旧来の階級構成表とそれほど変った所はない。しかし、資本家層と労働者階級にルンペンの形容詞をつけて呼ぶことには説明を要する」とされ、例えば、「非独占下請資本家層に相当する部分をルンペン・ブルジョア層と呼ぶことは、旧来の日本での観念からすれば疑問をもちうるであろう。経済的に外国資本に従属的で、政治的・イデオロギー的に自主性を喪失している状態に対する特徴づけ（旧中国での買弁資本）とも読みとれるが」と述べておられる。しかし後にふれるが、大橋方式とロブ・スチーブン氏方式は、もちろん表の作成手続をこえて、概念的に根本的な違いがあるし、「ルンペン」の規定は、外国資本への従属というところえ方はないロブ・スチーブン氏にユニークなものである。第三に、個別の階層に関して、とくに高級官僚層を、スチーブン氏がルンペン・ブルジョアジーに分類するのに対し、大橋氏は「私見は下部構造と上部構造のセクター区分をし、共に支配階級とする方がよいと思っている」と述べる。また2ヘクタール以上を所有する農家とその家族従業者（32万人プラス40万人）をスチーブン氏は、ルンペン・ブルジョアジーに分類するのに対し、大橋氏は、これを「資

本制農業者とみうるかどうか疑問」と述べられている。最後に、大橋氏は、大企業被雇用者のプチ・ブル性は、単に意識だけのものでなく、経済的基礎をもっているとし、これをプロレタリアートの仲間に入れるべきでないとするスチーブンの主張は、「プーランツァス、その批判者ライト、カルチェディ等の系列にあり、いわゆるマルクス主義再吟味派」（氏は、「アルチュセール派、フランクフルト学派、その他各種の新左翼理論など、最近の潮流をかりにこのように呼んでおく」と云われる）に属するものということができよう、という位置づけを与える。

大橋氏は「分析目的」で、アルチュセール派と世界資本主義派をとりあげる。氏は、これら諸潮流をふまえての、スチーブンの見解の内容の吟味を志向されていたようであるが、結局活字にはならなかった。

3. 階級構造ないしは階級構成をめぐる研究を国際的にみれば、1960年前後における『平和と社会主義の諸問題』誌を舞台とする「労働者階級の構成」をめぐる討論が、各国での検討を刺激したことがまず注目される。その後1970年代以降、論議の主要舞台は、「マルクス主義ルネサンス」下のヨーロッパ先進国に移ったとみてよい。1960年代以降のヨーロッパ社会の激動を背景に、粗けずりではありながらもマルクス主義をトータルに把握しようとする研究動向は、1980年代にかけて、とくに階級論・国家論の諸作を提供しつづけている。そこでは、政治的諸潮流を超えての批判・反批判、問題提起が特徴的である。内容的にみれば、国家間および国内の階級・階層間の搾取・収奪関係を、中心（都市）——衛星（周辺）概念を基礎に位置づけようとする新帝国主義派の主張をめぐってと、(A.G.フランク、A.エマヌエル、S.アミンに対するE.ラクラウの批判他)、いわゆる不生産部門の俸給取得者の増大という現実を背景に、これらの階層の階級的属性をどうみるか——労働者階級の一員か、別個の階級あるいは階層か——をめぐっての論議（フランス共産党、S.マレ、A.ゴルツ、N.プランツァス、E.マンデル、E.O.ライト、G.カルチェディ、A.ハント他）を焦点としているとみてよい。後の論点は「所有と経営の分離」現象の拡大の中での支配層、管理担当者の評価にかかわっており、‘control’とは？、‘rule’とは？の検討、そして専門的管理者階級（PMC；Professional-Managerial Class）の論議に及んでいる（J.エーレンライヒ他）。いずれの論点も、現実の国際的な経済・社会関係の枠組み、経済構造、とくにオートメ化の進展いちじるしい労働現場での分業・作業内容の発展・変化、今日の社会的、政治的、イデオロギ的諸関係、その中での闘争・運動の展開等についての一定の認識をふくみながら、階級・階層規定の視角・方法と階級闘争の具体的な現われとを媒介する諸カテゴリーの検討（ここでは、アルチュセールとアルチュセール派 N・プランツァスの諸著作が刺激を与えている）、そして社会改造の戦略——「議会の道」の評価を中心に——、したがって

現代国家の検討に及ぶものである。そしてまた当然のことながら、検討は、マルクスそのものにたちかえっての階級概念の再吟味、既存社会主義における支配・被支配関係、支配階級の有無、各闘争・運動の個別的実証研究にも広がっている。ごく最近には、マルクスやウェーバーにたちかえって関連主要論文を収録したものをふくめていくつかの論文集も用意されている(P.Walker ed. *Between Labour and Capital* <1979>, A.Giddens and D.Held ed., *Classes, Power, and Conflict* <1982>, R. Hyman and R. Price ed., *The New Working Class?* <1983>)。

日本での研究についてみれば、今日にいたる独占理論、国独資論、現代資本主義論、日本資本主義分析そして労働問題研究に、階級構造把握の基礎を提供し、直接の手掛かりとなるものが少くない。直接的に階級構成・構造の研究にかかわるものとしては、1970年代半ば迄は、階級構成表論に傾斜しての研究が主であったが、それ以降は、かなりの広がりとし積み上げをみせてきているといえよう。経済理論学会が1977年に「現代資本主義における階級」、1978年に「現代資本主義と労働者階級」を共通テーマとしたし、そこでも問題になったとくに日本の支配層の基盤として特殊な「法人資本主義」現象の理論的検討(北原勇、有井行夫氏他)、またこれも特殊な大企業体制に関して、職場の支配構造を労働内容、職場組織、組合、労働者意識等にそくしての検討(高木督夫、下山房雄、元島邦夫氏他)が進められているし、社会学からの地域ぐるみの支配構造の分析(北川隆吉他)、政治学からの国家装置分析、「先進国革命」にかかわっての研究(田口富久治、加藤哲郎氏他)があり、公務員労働者論など、特定労働者の研究も早くから継続している。

4. 以上の経過と、階級研究展開を背景においたうえで、1976年のスチーブン氏の論文内容に若干のコメントを加えよう。

まず、大橋方式の階級構成表とスチーブン方式のそれとを比較したのが参考表である。階級・階層の3大区分を前提したうえでの主な違いは、スチーブン方式では、大橋方式で自営業者層に属していた農業者が、ルンペンブルジョアジー、中間階級、ルンペンプロレタリアートに分属し、同じく自営業者がルンペンプロレタリアートに入り、雇用者が中間階級とルンペンプロレタリアートに分割されていること、このうち非農自営業者と雇用者の区分には規模別指標が基準となっていること、そしてとくにカテゴリーとして、ルンペンブルジョアジーおよびルンペンプロレタリアートという特有な階級・階層規定が登場していること、中間階級という規定の中に新中間階級がセットされ、その構成員として大企業雇用者、公務員、非雇用専門職がかかげられていること等である。もちろん、このスチーブン方式は、氏の階級把握の方法と、これによる日本の階級構造についての特有の分析とからきている。そこでいくつかの点を指摘しよう。

参考表

大橋方式とスチープン方式対照表

単位(1000人、%)

大橋方式 (1970年)			対応線	スチープン方式 (1968～70年)		
階級・階層区分	人数			階級・階層区分	人数	%
労働年齢人口(15歳以上人口)	78,721			就業人口	50,875	100.0
労働力人口(完全失業者を含む)	52,826	100.0				
就業人口(休業中を含む)	52,109	98.6				
A 資本家階級=(1)+(2)+(3)	2,633	5.0		A ブルジョアジー	1,338	2.6
(1)個人企業主	48	0.1		独占資本家	17	0.03
(2)会社役員と管理職員	2,475	4.7		ルンペンブルジョアジー	1,320	2.6
(3)管理的公務員	110	0.2		資本金5千万～10億円企業資本家	78	0.2
B(4)軍人・警官・保安サービス員	646	1.2		上層官僚	20	0.04
				資本家的農業者	323	0.6
				プラスその家族従業者	400	0.8
				その他	500	1.0
C 自営業者層=(5)+(6)	18,384	34.8		B 中間階級	17,319	34.0
(5)自営業者と家族従業者	17,535	33.2		新中間階級	12,155	23.9
(a)農林漁業従事者	9,570	18.1		大企業雇用者	8,225	16.2
(b)鉱工運通従事者	3,873	7.3		公務員	3,830	7.5
(c)販売従事者	2,892	5.5		非雇用専門職	100	0.2
(d)サービス職業従事者	1,200	2.3		古典的の中間階級	5,164	10.2
(6)専門的・技術的職業従事者と家族従事者	849	1.6		資本金100万～5千万円企業資本家	1,728	3.4
(7)上記のうち家族従業者	8,438	16.0		非法人企業資本家	2,461	4.8
				中規模農業者	477	0.9
				プラスその家族従業者	500	1.0
D 労働者階級=(8)～(14)	31,163	59.0		C ルンペンプロレタリアート	32,218	63.3
いわゆるサラリーマン層=(8)+(9)	9,668	18.3		周辺企業労働者	16,000	31.5
(8)専門的・技術的職業従事者	2,825	5.4		小規模企業者(プラス家族従業者)	6,018	11.8
(9)事務従事者	6,843	13.0		貧農	8,200	16.1
生産的労働者層=(10)+(11)	15,455	29.3		季節、臨時及び日雇労働者	2,000	3.9
10 農林漁業従事者	434	0.8				
11 鉱工運通従事者	15,021	28.4				
不生産的労働者層=(12)+(13)	5,323	10.1				
12 販売従事者	3,161	6.0				
13 サービス職業従事者	2,162	4.1				
14 完全失業者	717	1.4				
非労働力人口	25,895	49.0				
非労働年齢人口(14歳以下人口)	24,823	47.0				
総人口	103,720	196.3				

スチーブソン氏は、日本でも指摘され論じられてきたいわゆる差別格差構造ないしは大企業体制、あるいは「学歴社会」現象に注目して、経済的には指標として企業規模、社会的指標としては学歴をとりあげて、階級・階層を区分した。いずれも今日の日本社会における差別・格差の重要な要因であり、その分析は一見、現象をとらえているようにもみえる。しかし、たちいって考えればいくつかの難点をはらんでいるように思われる。

第一に、氏は、賃金・俸給取得雇用者を、企業規模別区分にもとづいて、新中間階級とルンペンプロレタリアートに区分し、公務員をすべて新中間階級に組み入れた。日本でのこれまでの研究の多くは、給与取得階層、公務員を、上層・中層として労働者階級の広い概念にふくめてきた。そして、日本資本主義の生産中枢に位置する生産的労働者をもふくめて、中間階級に入れるという把握は、いわゆるヨーロッパの労働者階級の区分をめぐる論議にもみられないものである。（氏が独占的利潤の説明の際に大きく依拠したE・マンデルにしても、都市工場労働者をこそ重視している）。第二に、農民層を3区分して、上層をルンペンブルジョアジーに、下層をルンペンプロレタリアートに区分しているのも、これまでの日本の農業・農民問題研究に照らして無理がある。商社や食品産業が農業関係分野に進出して、資本－賃労働関係を成立させているということはあるにしても、たかだか2ヘクタールを基準にブルジョアジーとみなすこと、他方、兼業化が広がる中での小土地所有者を「貧農」範疇でとらえようとするのもいかなものか。第三に、小零細企業者のとらえ方、そして第四に、軍隊・警察に言及がない点はおくとして、高級官僚は独占資本家階層の一角には位置づけられないのか。第五に、「ルンペン」という規定は必要であるのか。第六に、「搾取の諸条件を廃止することができ、その意思をもつ階級はつくりださ」れていないとして、中規模企業の労働者にのみふれるだけのペシズム。

ここでは、氏における階級分析の方法ないしは基礎理論が問題視されよう。氏は、まず「アルチュセールの洞察」の日本への適用がないことを指摘され、アルチュセール派を継続するかの如くである。しかし、その後の論述においては、アルチュセール派に独占資本主義認識が欠けていることを指摘し、独占資本による搾取とその分配を重視し、企業規模指標を以て階級区分に進まれている。この論文では、氏がイデオロギーと政治の領域の階級構造への影響の問題をとりあげなかったこともあって、経済領域からする分析が主となっている。学歴や、経済団体や農協といった組織もとりあげられるが、これも日本における分析では普通にとりあげられるところである。学歴にはかなりの重点がおかれているが、これを以てアルチュセール派（この派については独自の検討を要する）を云々することはできまい。むしろ、全体として「従属理論」の影響があるのではあるまいか。ここで従属理論（「新帝国主義論」、「第三世界革命論」等とも呼ばれる）とは、P.M スウィー

ジーの経済理論を引きついで、とくに A.G. フランクによって定式化され、S. アミン、A. エマヌエル、他によって補足・強化されている理論である。これは、一言でいえば中枢が衛星を搾取・収奪するという中枢（中心）－衛星（周辺）の基本関係を、今日の世界帝国主義と低開発国の間に、そして低開発国内部の経済・階級関係の中に見出す理論である。低開発国が低開発の状態は、世界規模で、資本主義中枢国の発展そのものによって、すなわち中枢資本主義国による低開発国からの経済剰余の吸いあげによって生み出されている。この中で階級関係についてみれば、先進資本主義国の労働者階級は剰余にあづかって革命性を喪失しており、後進国においては、ブルジョアジーは中枢国資本が後進国を支配する際の道具となりはてていてルンペン・ブルジョアジーと呼ぶべきであり、工業プロレタリアートもブルジョアジーの庇護の下に、後進国内の中枢に位置して革命性を失ったとする。そして都市の中産階級ないし「浮動」層の「部外者層」（＝「ルンペンプロレタリアート」？）、周辺たる農村部の農村プロレタリアートないし貧農層に変革の主体を探り出そうとする。この場合変革のための闘いの主敵は帝国主義であるが、直接の敵は、後進国のブルジョアジーであり、戦略は、周辺・武装・社会主義革命であるとされる。この理論に対しては、批判も多い。例えば、その基礎にある剰余収奪に関する経済理論が、流通主義的であるという批判を受けており、価値論からの説明も成功してはいない。そして低開発国について、民族ブルジョアジーの二面性の無視や工業プロレタリアートの役割の否定に関して疑義が提出されているし、先進国における変革への悲観主義も批判を受けている。

そこで、スチーブン氏に戻ると、従属理論が国際関係を最重要視したのに対して、中枢国・日本の低開発国からの収奪にふれられておらず、また日本のマルクス主義的分析では、何らかの形でつねにとりあげられる日米関係の分析がない点で、従属理論と大きく違う。しかし、一国分析としては、分析には幾多の共通性がみられる。すなわち、独占に対する非独占資本家を中枢国資本に対する民族ブルジョアジーと同じ位置におき、中枢の道具として二面性をみない点、中小零細企業家をふくむ「中間階級」についても、中小零細企業労働者等「ルンペンプロレタリアート」との統一や同盟の相手よりも対立の相手となる側面に重きをおく点、ルンペンプロレタリアートは、工業プロレタリアートとちがって、ブルジョアジーを打倒する力をもたないとする点、独占資本家と、中間階級とに依存する根なし草的階級としての「ルンペン」という規定をもちだす点などである。

5. 先にもふれたとおり、氏にはその後の論文がある。1979年の「日本のブルジョアジー」では、「ルンペンブルジョアジー」という規定がなくなり、資本家的農業者階層は登場しない（そして業者をふくめる反独占の戦略への批判があらわれる）。1980年の「日本の労

働者階級」でも、「ルンペンプロレタリアート」規定がなくなり、(a)労働貴族、(b)大衆的労働者、(c)産業予備軍、の3層区分が登場する。そして、日本の労働者の勤勉、企業への忠誠を、性差別、年令差、学歴差そして従来の家族主義イデオロギー、地位意識を中心に説明しようとする。これらの諸論点は、これまでの日本での階級・階層分析とかなりかみあうものと思われる。とはいえ、スチーブンス氏の新たな分析の全体は、この二論文をふくんだ単行本を得たうえで改めて与えられるものであり、論評もこれを待たなければならない。

6. この資料で訳出した論文は、日本統計研究所の「統計参考資料」がこれまで主としてとりあげてきたものとは、異質である。参考資料としてこれを収録したのは、一つには階級構成の統計による計算は、社会科学における統計利用の原型——統計が示す基礎概念が決定的に重要である——の一つであり、社会統計学がかなり手がけてきたという経過と、二つには、統計学が、統計学内にとどまることなく、広く社会諸科学に重要な問題や素材を提供するとともに、各分野の成果を吸収することが必要であるという考えにたつてのことである。

最後に、私事めくが、訳者がこのR.スチーブンス氏の論文を入手したのは、故大橋隆憲氏にコピーしていただいたのであった。そして生前の最後に、京都で10月にお会いした際イノダの前での別れぎわの話が、R.スチーブンス氏による4月出版予定の書物のことで、「出版の際には紹介論評をするから、R.スチーブンス氏によりしく伝えてもらいたい」と依頼されたのであった。R.スチーブンス氏に大橋氏の逝去を伝えることになったことを哀しみたい。

(訳と解説は伊藤陽一が担当した)。